

探究する心を育むⅢ

～道具との関わりを手がかりにして～

○灰谷知子 伊集院理子 石川綾子 上坂元絵里 佐藤寛子
杉浦真紀子 高橋陽子 渡辺満美 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

I はじめに

本園では「探究力・活用力が発揮される生活」というテーマで園内研究をすすめている。昨年度は、子どもが好んで関わり惹きつけられる「透明」なものに着目し、探究の道筋を明らかにした。今年度の研究の切り口を探る話し合いの中で、変わった形の道具（漏斗）に惹きつけられる子どもの姿が話題にのぼり、そこから日用具（すり鉢、じょうごなど）を巧みに使って遊ぶ子どもの姿に話題が広がった。子どもは本来の道具の用途だけでなく、豊かな発想で遊びに活かしたり組み合わせたりしている。それは、道具そのものが「使ってみよう」という気持ちを引き出し、ものとの距離を縮め、子どもの探究心を誘うからではないかと考えた。そこで道具と子どもとの関わりを丁寧に見ることで、子どもが探究を深める過程と、それを育む教師の援助について省察していくこととした。なお「道具」は以下のように定義している。

道具とは、園生活の主体である子ども一人ひとりが、遊びの中で思いを実現しようとするときに活用する「もの」、遊びを創り出すときに必要不可欠な「もの」

II 事例 5つの柱に分け、事例の概略を示す。

手に持つ 「僕たち消防士」

A児はフルイやシャベルをいくつも抱えて持つ。お気に入りには長く赤いスコップ。「火事です」と言いながら、ずるずるとひきずり歩き回る。
*考察*ものを手に持ったり、ひきずって歩いたりすると、自分の身一つで過ごすのは心許ない不安な気持ちが、地面に根を張ったような安定感につながる。

使ってみる 「泡作り」

石鹸を削って遊ぶ子どもたち。どうせ使うなら気持ち良く使えるようにと思い、泡だて器、ネットなど新たな道具を教師は揃えた。早速道具を使って泡作りをする。水と石けんの量、泡立て方で、全く違う質感の泡ができる。
*考察*使う程に、力の入れどころや抜きどころが分かり、道具がもつリズムに身体が共鳴する。道具を使ってものを生み出すことに子どもは夢中になる。

選んで使う 「うつつ絵」

「先生、細い鉛筆ちょうだい」とB児。手にはうつつ紙を持っている。紙が動かないよう力を入れて押さえ

ながら、慎重に細い鉛筆で図鑑の鳥の絵をなぞる。
*考察*細かいところまで丁寧に描き、本物に近づけようとする思いが、B児が選んだうつつ紙と細い鉛筆とで実現していく。道具の特徴を見極め、より使いやすく適したものを選ぼうとする。

活かして使う 「調理道具の整理」

三和土でごっこ遊びをする子どもが近くのボール棚に気づく。そして棚にままごと用の鍋や皿を洗ってふせながら、きれいに分類を始めた。並べ終わると、「ここがお家ね」と確かめ合い、また遊び始めた。
*考察*ボール棚の形状は台所の棚と重なる。身近なものから発想し、効果的に遊びに活用することでイメージが広がり、より遊びが豊かになる。

つくって使う 「鯛焼き器」

「鯛焼き屋をやる」とC児。教師がイメージを聞くと、「パタンと挟むんだ」と空き箱に棒をつけてつくったものを見せる。C児の発想を楽しく感じた教師も材料などのアイデアを出し、鯛焼き屋が始まる。試行錯誤を重ねる中、売る側にも買う側にも大勢の人が集まってきた。
*考察*見てきたものを再現し、工夫してつくった道具は、仲間を引き寄せ、遊びを盛り上げる。子どもの思いを受けとめ、つくりあげた道具によって「本物らしさ」がもたらされる。

III まとめ

「もの」を手に持ち安心すると、子どもはそれを「道具」として使い始める。使ってみる中で「道具」本来の特徴や用途を身体を通して理解する。そして遊びや生活の必要な場面で自分に合った「道具」を選び、活かすようになり、時には試行錯誤を繰り返して「道具」そのものをつくりだそうとする。子どもが道具を使いこなし、道具との関わりを深める過程が明らかになった。そのような過程をたどる中で、より深く考え工夫しようという「探究する心」が育まれていく。

また「探究する心」を育むには、教師の援助として、ものと柔軟にじっくりかかわることができる体験の保障、ものや人とのかかわりが豊かにうまれる環境構成の工夫、子どもの思いを理解しようと感覚を研ぎ澄ませてかかわる感性などが、大事であることが明らかとなった。